

政治においては、騙された、というのは言い訳にはならない。

——レシエク・コワコフスキ

目次

- | | | |
|----|--------------------|----|
| | プロローグ◆歴史と暴政 | 5 |
| 1 | 忖度による服従はするな | 13 |
| 2 | 組織や制度を守れ | 18 |
| 3 | 一党独裁国家に気をつけよ | 22 |
| 4 | シンボルに責任を持って | 28 |
| 5 | 職業倫理を忘れるな | 34 |
| 6 | 準軍事組織には警戒せよ | 38 |
| 7 | 武器を携行するに際しては思慮深くあれ | 42 |
| 8 | 自分の意志を貫け | 46 |
| 9 | 自分の言葉を大切にしよう | 54 |
| 10 | 真実があるのを信ぜよ | 60 |
| 11 | 自分で調べよ | 68 |

12	アイコンタクトとちよつとした会話を怠るな	77
13	「リアル」な世界で政治を実践しよう	80
14	きちんとした私生活を持つとう	84
15	大義名分には寄付せよ	89
16	他の国の仲間から学べ	93
17	危険な言葉には耳をそばだてよ	97
18	想定外のこと起きてても平静さを保て	101
19	愛国者たれ <small>ペイトリオット</small>	109
20	勇気をふりしぼれ	114
	エピソード◆歴史と自由	115

解説 国末憲人 125

訳者あとがき 139

プロローグ◆歴史と暴政

「歴史は繰り返す」と言われますが、そんなことはありません。けれども、教訓を与えてくれるのは確かです。アメリカの建国の父たちが憲法起草を議論した際に、彼らは自分たちの知っている歴史から教訓を引き出しました。彼らが思い描く民主的な共和国が崩壊してしまうことに懸念を抱いた建国の父たちは、古代の民主制や共和制が寡頭政治や帝国に墮落してしまったことについて熟考しました。彼らの知識ではこうでした——アリストテレスは不平等が不安定をもたらすと警告しましたし、他方プラトンは、僭主タイラントとしての座に就くためにデマゴグが言論の自由を悪用すると考えていました。法に則って民主的な共和国をうち立て、チェックアンドバランスの仕組みを構築するのの際して、建国の父たちは、古代の哲学者たちの言葉を借りて僭主制タイラニーと呼ぶもの、近代風に暴政や専制と呼んだ方が良いでしょうが、それを防ごうとしました。彼らが頭の中に描いていたのは、単一の個人な

いし集団による権力奪取とか、支配者が自分の利益のために法を回避することでした。アメリカ合衆国においてその後も続いて起きた政治論議のかなりの部分が、現在に至るまで、アメリカ社会における暴政テイラーニの問題に関わるものでした。たとえば、奴隷に対する暴政、婦人に対する暴政のようにです。

よって、自分たちの政治秩序が危機に曝されているように思えるときには歴史を温たねることが、建国初期からのアメリカの伝統です。仮に私たちがいま現在、アメリカの実験が暴政によって脅かされていると心配をしているなら、私たちは建国の父たちの例に倣なって、他の民主制と共和制の歴史を熟慮の対象にできるのです。良い知らせは、私たちが古代ギリシアや古代ローマよりも最近のしかも適切な例を利用できることです。悪い知らせは、現代の民主制の歴史もまた衰亡の道を辿たっていることです。アメリカ一三植民地が建国の父たちが暴政テイラーニと見なしたイギリスの君主制からの独立を宣言した一七七六年以降、ヨーロッパの歴史は、三回大きな民主的な局面を迎えました。一九一八年の第一次世界大戦の後、一九四五年の第二次世界大戦の後、そして一九八九年の共産主義の終焉の後です。この三つの転機に建設されたたくさんの民主制が、私たちを取り巻く現在の状況にいくつかの重要な点で似た状況の中で、破綻してしまっただけです。

私たちは歴史になじみ、歴史から警告を受け取ることができません。一九世紀末には、二〇世紀末がそっくりなのですが、グローバルな貿易の拡大が進歩への期待を生み出しました。二〇世紀初めには、二一世紀初めがそっくりなのですが、進歩への期待は、指導者か党かが民衆の意志を直接的に代表していると言いつ張る民衆政治マスボリティクスという新しいヴィジョンによって異議を唱えられました。ヨーロッパの民主制は一九二〇年代、三〇年代には、右翼の、オーストリリアシステム権威主義やファシズムへと墮落してしまいました。一九二二年に創設された共産主義のソヴェエト連邦は、一九四〇年代には共産主義モデルをヨーロッパに拡大しました。二〇世紀のヨーロッパ史が私たちに教えてくれるものは何かと言えば、社会が破綻するのも民主制が崩壊するのも、道義が地に墜ちるのも、普通の男たちが銃を構えて死の穴への縁に立つのも、何もかもありうるのだということです。その理由を理解することは、こんにちの私たちにあって、たいそう役に立つはずです。

ファシズムも共産主義も、グローバリゼーションに対応するものとして出現しました。グローバリゼーションが生み出したほんものの目に見える不平等と、そうした不平等と取り組む点で民主制が無力であることにどう対応するかが課題だったのです。ファシストは意志の名のもと理性を拒絶しました——民衆に発言権を与えるのだと主張する指導者たち

によつて巧みに描き出された輝ける神話を選んで、客観的な眞実は拒んだのです。彼らはグローバリゼーションの特色をはつきりと前面に出しました——そしてグローバリゼーションがつきつける複雑な問題の数々は、国家に対する陰謀の結果なのだと言張したのです。ファシストは、支配そのものは一〇年か二〇年に過ぎませんでした。後に完全な形での智恵を残していきましたし、その智恵は今や日に日に時世にそぐうものとなっているのです。ソヴィエト連邦で七〇年ほど、東ヨーロッパのほとんどで四〇年以上と、共産主義者の支配はもつと長いものでした。共産主義者が提案したのは教育を受けた「党エリート」による支配であり、党エリートは歴史の不変とされる法則に順つて確かな未来へと社会を導く理性を専有していたのです。

私たちは、「私たちが受け継いだ民主的な相続財産ヘリテイジが自動的に私たちをそうした脅威から守ってくれる」、そう考える筈にはまりかねません。これは見当違いの反射作用です。実際に、建国の父たちによつてつくられた先例に倣つて、暴政の眞因を理解し暴政への適切な対応をするためにこそ、歴史を精査するよう私たちは求められています。こんにちのアメリカ人は、二〇世紀に民主主義がファシズム、ナチズム、共産主義に屈するのを眺めていたヨーロッパ人よりも聡明なわけではありません。私たちにとって一つ有利な点

を挙げれば、私たちがそうした二〇世紀のヨーロッパ人の経験から学べるだろうというこ
とです。今こそ、そうするのに適切な時機なのです。

本書では、こんにちの状況にふさわしいものとして、「二〇世紀の歴史に学ぶ二〇のレ
ッスン」を取り上げてゆきます。

暴
政

忖度による服従はするな

権威主義の持つ権力のほとんどは、勞せずして与えられるものです。現在のような時世においては、個人は予め、より抑圧的になるだろう政府が何を望むようになるかを忖度し、頼まれもしないのに身を献げるものです。このようにして適応しようとする市民は、権力に対して、権力にどんなことが可能かを教えてしまうのです。

忖度して服従するのは、政治的には悲劇をもたらします。おそらく、市民が何らかの価値や原理を、自ら進んで^主枉げるなどということをも、支配者たちは初めは理解していませんでした。おそらく、世の新体制なるものも、あれやこれやと手を尽くして市民たちに直接に影響力を行使する、そんな手段を当初は持っていませんでした。アドルフ・ヒトラーに組閣を許した一九三二年のドイツの選挙、共産主義者が勝利を収めた一九四六年のチェコスロバキアの選挙の後の次なる重要なステップは何だったかというところ、忖度による服従が見られたことでした。どちらの例においても、十分な数の人間たちが自発的に新たな指導者に精一杯の献身を示したからこそ、ナチスも共産主義者も同じように、「自分たちは速やかに完全な体制変革に進めるのだ」、そう気づいてしまったのです。熟慮を欠いた服従という初めの行為があったので、次の段階では逆戻りできないものとなってしまったのです。一九三八年初めに、その頃までにはしつかりとドイツで政権の座を固めていたアドルフ・ヒトラーは、隣国オーストリアを併合すると脅していました。オーストリアの首相が

讓歩した後、オーストリアのユダヤ人の運命を決めたのは、オーストリア人の村度による服従でした。地元のオーストリア・ナチ党員はユダヤ人を捕まえ、ペンキで描いた独立オーストリアの徴を取り去ろうと「舗道こすり」をさせました。決定的だったのは、ナチ党員でなかった一般人までもが興味津々、面白がってそれを傍観し、「舗道こすりパーティー」にしてしまったことでした。ユダヤ人の資産目録を入手していたナチ党員はできるかぎりのものを盗みました。決定的だったのは、ナチ党員でなかった第三者もその盗みに加わったことでした。政治理論家ハンナ・アーレントが記憶しているように、「ドイツ軍部隊がオーストリアに侵攻し、キリスト教徒の隣人たちがユダヤ人の家で暴れ回りだすと、オーストリア・ユダヤ人は自死を選び始めた」のです。

一九三八年三月のオーストリア人の村度による服従は、ナチスの高官たちに、どんなことが可能かを教えることになります。アドルフ・アイヒマンがユダヤ人移民局を創設したのは、この年の八月、場所もウィーンでした。一九三八年一月になると、三月のオーストリアでの例に倣って、ドイツのナチスが水晶の夜として知られる全国的規模のポグロム（ユダヤ人に対する殺戮を伴う集団的暴力行為）を組織したのでした。

ドイツがソ連に侵攻した一九四一年には、SS（親衛隊）が、別段考案しろという命令

は受けていなかったのですが、大量殺戮のやり方を考案するうえで主導権を握りました。SSは、彼らの上司の望みを忖度し、何が可能かをやって見せたのです。それは、ヒトラーが考えていたものよりもずっと徹底したものでした。

そもその始まりにおいては、忖度による服従が意味するのは、熟慮もせずに新しい状況に本能的に適應することなのです。「はたしてそう振る舞うのはドイツ人だけだろうか？」ナチスの残虐行為を熟考していたイエール大学の心理学者スタンリー・ミルグラムは、ドイツ人が実際にとった行動の原因究明となるような、ドイツ人特有の権威主義的なパーソナリティがあることを証明しようと思いました。ミルグラムは、その説を検証しようとする実験を考えだしたのですが、ドイツでその実験を行う許可は得られませんでした。そこで彼は、代わりに、一九六一年にイエール大学の建物の一つで実験を行いました——アドルフ・アイヒマンが、ナチスのホロコーストで果たした役割のためにイエールサレムで裁判にかけられていたのと時期がほぼ重なります。

ミルグラムは、被験者（イエール大学の学生もいれば、イエール大学のあるニューヘイヴンの住民もいました）に向かって、「あなた方は学習についての実験で他の参加者に電気ショックを与えることになります」と説明しました。実際に、ウィンドーの反対側には、電極

につながれた人々がミルグラムの計画に従って座っていました。ただし、電気ショックをかけられたふりをするだけだったのですが。被験者（と本人たちは思っていました）が学習実験の参加者たち（と被験者たちは彼らのことを考えていました）に電気ショックをかけると、恐ろしい光景を目の当たりにすることになりました。彼らの見知らぬ、また何ら不満を抱く対象でもない人間たちが、七転八倒する様子を見せたのです——ガラスを叩き心臓が痛いと言ったのです。そうなくても、ほとんどの被験者はミルグラムの指示に従って、犠牲者が亡くなったと見えるまでさらにずっと激しい電気ショック（そう被験者たちは考えていたわけです）をかけた続けたのでした。同胞を（うわべのものでしたが）殺害するに至らなかった被験者たちでさえ、電気ショックをかけた相手の参加者たちの健康状態について尋ねることもせず、その場を立ち去ったのでした。

ミルグラムの理解したところによると、人々は驚くほど、新しい状況下での新しい規則を受け入れやすいのです。彼らは、新しい権威によってそうしろと指図された場合には、新しい目的に貢献すべく意外なほどに進んで他人を傷つけ、殺害するのです。ミルグラムはこう回想しています。「私は「村度による」服従をたくさん見たので、もうドイツで実験を行う必要を認めなかった」と。

組織や制度を守れ

私たちが品位を保つ助けとなっているのは組織や制度なのです。また、組織や制度の方でも私たちの助けを必要としています。組織や制度のために活動することでその組織や制度をあなた方のものとするのでないかぎり、「自分の組織」とか「自分の制度」などとみだりに口にしてはいけません。組織や制度は自分の身を自分では守れません。あなた方と組織や制度とが最初から守り合うのでなければ、お互いに駄目になってゆくのです。だから、気にかける組織や制度を一つ選んでください。法廷、新聞、法律、労働組合——何でもよいからその味方になることです。

私たちは、「組織や制度というものは、これ以上ないほど直接的な攻撃に曝されても、自動的に維持してゆけるものだ」、そう決めてかかっているところがあります。そう決めてかかったのが、ヒトラーとナチスとが組閣した後で、ドイツのユダヤ人のいくらかが犯してしまった過ちの正体なのです。たとえば、一九三三年二月二日に、ドイツのユダヤ人にとつての代表的新聞が、そうしたはき違えた確信を次のように述べた社説を發表しています。

我々は、とうとう待ち望んでいた政権の座に就いたヒトラー氏と彼の仲間が、「ナチスの新聞に」流布されている提案を実行に移すだろうという考えに同意できない。彼らとてドイツのユダヤ人から憲法で定められた権利を突然奪つたり、ユダヤ人をゲッターに囲い込んだり、暴徒の嫉妬交じりの残忍な衝動にユダヤ人を曝させたりするわけがない。多くの重要な要因が権力を抑制しているので、彼らとてそうしたことは

できないし……また明らかにそうした形でのことの運び方を望んでいないのだ。いざヨーロッパの大国として行動するなら、全体的な雰囲気も、自国の良い面についての倫理的な省察に向かい、それまでの敵対的な態度に立ち戻るのを避ける傾向を示すものだ。

一九三三年にはたたくさんの理性的な人間がそのように考えていました。これは、いま現在たたくさんの理性的な人間が考えているのとまるで変わりません。過ちは、組織や制度を通じて政権の座に就いた支配者たちは——たとえそれが彼らがそうしてやるとまさに宣言してきたことだとはいえ——よもやその組織や制度を変えたり潰したりはできないと頭から決めこむことなのです。革命家というのはときとして、一緒くたにして組織や制度を現実に破壊しようとするものなのです。これぞロシアのボルシェビキの手法だったので。また、ときとして、組織や制度は、活力や機能を剥ぎ取られて形骸化してしまうことがあります。そのことで、組織や制度は新秩序に抵抗するのではなく、むしろ新秩序を進んで受け入れてしまうこととなります。これがナチスの呼んだ「強制的同一化」にあたります。新たなナチス体制が同一化をするのには一年とかかりませんでした。一九三三年が終わ

るまでには、ドイツは一党独裁国家となっていました。主要な組織や制度すべてが、取るに足らないものとされてしまったのです。ドイツ政府は、新秩序が確かな承認を受けるためにその年の十一月には国会の選挙も行いましたし（野党は存在しませんでした）、また国民投票も行いました（「正しい」回答が投票者にわかっている争点——国際連盟脱退——についての国民投票でした）。ドイツのユダヤ人の中にはナチス指導者が望むように投票した者もいくらかいましたが、これはそうやって忠誠のポーズを示すことが新制度と彼らユダヤ人とを結びつけるのではと願ったことでした。虚しい望みとなったのは言うまでもありません。

一党独裁国家に気をつけよ

国家を改造し、ライバルを抑圧した政党も、出発時点から絶大な権力を有していたわけではありません。そうした政党は、敵対者たちの政治活動を不可能にするために、歴史的瞬間とやらを巧みに利用したのです。よって、複数政党制を支持し、民主的な選挙のルールを守ることです。投票ができているあいだは、地方選挙でも国政選挙でも投票することです。公職に立候補することも考えて欲しいですね。

「不断の警戒は自由の代償だ」と述べたのはおそらくトマス・ジェファソン本人ではないのでしようが、彼の時代の他のアメリカ人たちがそう述べていたのは確かです。私たちがこんにちこの格言を考えるとときに、私たちは国外へ向けての正当な警戒、心得違いで敵対的な第三者に対しての正当な警戒を思い浮かべるものです。私たちは自分たちを、「マタイによる福音書」に出てくる「山の上にある町」だと、民主主義の砦だと見なして、外国からくる脅威を待ち受けるのです。けれど、その格言の意味はまるで違ったものです。つまり、人間の性が元々こうしたものであるから、アメリカの民主制は、民主制を終わらせるために何と民主制の持つ諸々の自由を悪用しようとする「アメリカ人」自身から守られなければならないのです。アメリカの奴隷制廃止運動家のウエンデル・フィリップスは、実際に、一八五二年に「不断の警戒は自由の代償だ」と述べています。フィリップスは、「人民の自由という天の恵みは毎日採取せねばならず、さもなくばすぐに腐敗する」とも付け加えています。「出エジプト記」に登場する、神が天から降らせた食べ物のマナの特